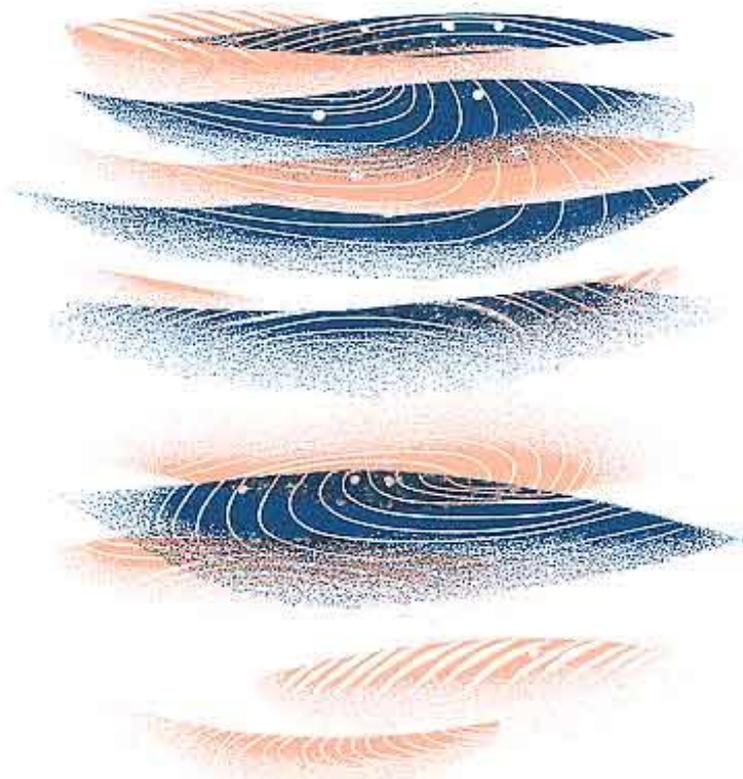


昭和46年2月1日第3種郵便物認可
平成16年1月1日発行（毎月1回1日発行）
俳句雑誌 沖 第33巻第1号

俳句雑誌「おき」

沖

通巻四〇〇号記念号 1月号



沖
発行所

PDF 制作

俳誌の salon

夢裡登四郎

林 翔

最初の新年号

登四郎が夢裡に笑みをり紅葉酔

登四郎の御霊よ遊べ瀬の紅葉

良寛像は登四郎に酷似す

越後路で登四郎に逅ふ紅葉酔

巖十重水は七筋紅葉谿

今度の新年号が四百号と思うにつけて、「沖」最初の新年号を読み直したくなった。昭和46年1月号である。題字小暮青風、表紙絵加藤利以地。表紙裏には主宰の「新春のことば」と新たに推薦された第一期同人七名の名。また第十回俳人協会賞が林翔に決定したことを報じてある。

寄稿は歌人小野興二郎氏の「式部渴仰」四頁。主宰の文章も四頁で、「笠翁の芭蕉像」と題し、登四郎氏の伯父山本掃雲氏の箱書が紹介され芭蕉の高弟小川破笠の作を原型として帝室技芸員諏訪蘇山子を作った模像三十六体の中の二体と知られる。山本掃雲は曾良の『奥の細道随行日記』を発見して俳文学上に大きな功績を残した人。登四郎氏はこの伯父君の手ほどきで中学三年の頃に俳句を作り始めたのだという。

主宰作品は「北窓」と題して、目貼りするやころの中の北窓も等の十句。十句目には「翔さん俳人協会賞決定」という前書きで、

栄光の日も無為のごと胡桃食ふがある。登四郎氏と私とは市川中学

幹を見よと杉は言ふらし紅葉どき

走り去る自動車瞬の紅葉染

浮く鯉がさす紅傘よ散紅葉

風の日や落葉は空を遊ぶもの

快きわが耳朶よ冷えし手よ

うまさうな雪の匂冬の扇かな

一茶記念館より贈られし

校（旧制）の同僚だが、私が空き時間

間に職員室で胡桃（郷里から送られてきた物）を食べていると、同じく

空き時間だった登四郎氏が近寄ってきて、翔の俳人協会賞受賞決定を報告

させてくれた。氏は既に選考委員になっており、前日に選考委員会があつ

たのだ。私が飛び上がって喜ぶと思いきや、平然と胡桃を食べ続けている

たことを詠まれたものである。

翔作品は「寒星」と題して十句。

特別作品は福永耕二と都筑智子で各十五句。他に中島秀子と植松たか子の

二頁ずつの小品。創刊号の特別作品評を四名が一頁ずつ。登四郎・翔

の作品の下にそれぞれ五百字随想が載っていることも今と同じである。

沖作品の投句者数は一九二名。創刊号の八八名の倍以上になっていた。

林
翔



座敷杖

能村 研三

父からもらった序句

合掌家 炉守り 老爺の 座敷杖

四囲に 楢積み みて 砦の 画家 工房

湯布院

神迎ふ 雲を たまはり 由布 二峰

枯山に 鋼索の 綱ゆるび なし

この一月「沖」が四百号を迎えることもあって、私の五番目の句集を出すことになった。『磁気』を刊行したのが、平成九年の秋であるから、六年が経ってしまった。もっと早く纏めたいと思っていたが、日常の忙しさにかまけて延び延びになっていたものである。

題名は「滑翔のちからを貯めて鷹渡る」の句から『滑翔』とした。「滑翔」は鷹が渡る時、羽ばたきを止めて飛翔することで、エネルギーを無駄に費やさない鷹の知恵でもある。第一句集の『騎士』以来、『海神』『鷹の木』『磁気』と硬質なイメージの題名をつけているので、この名にした。今回の句集の刊行は私にとって、主宰の継承、父登四郎との別れと人生の大きな節目ともなったので、その感慨は深い。

今までに刊行した句集には、父からいろいろなアドバイスはもらったが、

山頂の鉄塔に棲むもがり笛

冬晴れや由布の雄岳は天そそる

ひと腕の由布の盆地に冬日さす

長崎・神の島教会

師走朔日海のしるべの崖マリア

聖水盤の手垢がぬくし冬日影

傾聴の耳当て冴ゆる懺悔台

序や跋を一度も書いてもらったことはなかった。

ただ、今度の句集には、あとがきの中でも述べたが、私へのメッセージでも言うべき父の一句がある。

樫やゆづるべき子のありてよき

登四郎

父の最後の句集『羽化』に収められていて、私が平成十年に「沖作品」の選を行うようになった時の句で、今してみれば一誌を継承することの重みと責任を感じる一句でもある。

句集『滑翔』には、「扉に序句を配する形はとらないが、私の心の中では父からもらったたった一度の序句にしたいと思っている。

能村研三



蒼茫集



雁渡し

羽根嘉津

幾世経し梁の手斧目雁渡し
家霊いくつ鎮めダム湖の紅葉晴
祖の山へ始動のこだま晩稻刈
田の鷺の思惟か祈りか冬に入る
ゆくりなき出逢ひしばしの石露明り
癒えし子に強ふる摂生神の留守

たまのをの花

梅本豹太

赤き実の疾く赤くなれ小鳥来る
敦盛の緋威に菊惜しまざる
長き夜の一滴人間ドックかな
赤い羽根胸に小さな風がくる
たまのをの花気がつけば盛り過ぐ
黒髪のあやしまれをり紅葉の賀

ときめき

藤原照子

紅葉への碑へのときめき飛驒に入る
集落の沈める湖や夕紅葉
朝市のゆき交ふことば霧まみれ
師に夫に蹤きしは遥か飛驒路秋
露けしやかかの日のままの万歩計
コンビナートの炎を対岸に冬薔薇

切株

大畑善昭

山々の影の合せ目秋入日
秋の蚊の止まるとみしがすぐに刺す
火恋しのやうやくに恋成就の火
産卵終へ流れにその身まかす鮭
切株は小春のうてな天道虫
枯るる中枯れゐてへくそかづらの実

『梵天唄』

(自選二十句)

池田 崇

塩汁を啜り土着を思ふべし
寄らば大樹と柴漬の小魚よ
久保田博の赤きセーター着てみたる
寂鮎も昂ぶる過去を持つてゐし
水澄めるごとと穏やかに銀婚へ
どぶろくの出処は知らず酌みゐたり
端居とは微かに老いの匂ひ持つ
でで虫の未完の渦を背負ひたる
思ひ出は何時も夕焼絡みかな



— 《第32回沖賞受賞作品抄》 —

新涼と言ふ手触りのよさに似し
小かまくら羽授かれば星空へ
父の日と言ふぎこちなき日なりけり
茄子の馬父が作れば耕馬なり
菊人形悲運の將に仕立てらる
妻の名を呼ぶも久しき喜雨来たる
蓑虫の蓑着る故に憎まれず
嬰の拳いつも湿りてみどりの日
桜湯を出す子よ粗相なきやうに
追ひ付けさうで縮まらぬ雪の道
冬うらら何時とはなしに孫五人

『啐啄』(自選二十句) 秋葉 雅治

まゆ玉や筑波風も千住まで
気がつけばゑひざめのごと松過ぎし
寒明くる持葉の縛をひとつ解き
虫出しの雷や巻尾の正誤表
誇りだけ男にのこる花吹雪
傘雨忌のしもたやに貼る祭触れ
父の日の絆深むる無口かな
しばらくを抜き足にする簞
ほつるるや淡交ながき竹夫人



— 《第26回珊瑚賞受賞作品抄》 —

蚊柱に立錐の余地ありにけり
花あげて泰山木は望のいろ
車庫入れは虫の世界へ後ずさり
方違へせし流星の不覚かな
手練れとも手抜きとも松手入あと
秋燈に重ねて小さき居職の灯
居酒屋を出て三の酉二度詣で
倫敦の字はもう読めず漱石忌
古書漁りつつ短日の端にゐる
高言のあと蕭条と返り花
かんじきやここより孤立無援なる

年間 二十句

谷口みちる

師の遠し男の国に入る霧襖
招くとも追ふとも風のすすき原
風の声樹のこゑ秋思深まりぬ
祈る折る字の似て聖夜跪く
北風のせて潮騒高し憂国忌
鉄塔に棲みついてゐる虎落笛
初景色撮らむと夫の翁眉
はつ雪を硯の海へひとすくひ
篆刻の切先寒の日を聚む



— 《第 32 回沖新人賞受賞作品抄》 —

大地よりもらふ治癒力青き踏む
屋敷林の奥あたたかき三輪車
霧やラジオの声のくぐもりて
花筏潮入川をさかのぼる
麦秋や好きなところに停まるバス
朝涼やフランスの水注ぎ分けて
風鈴や十指に余る転居して
海のいろ波うたせつつ甚平縫ふ
手紙派のかな文字涼し見舞状
炎屋のはじき返さる磁気切符
印泥に油の浮きし厄日かな

年間 二十句

高橋あゆみ

磨きこむナイフとフォーク寒波来る
石鹼に真竹の香り寒波来る
屋根裏に鳥の巢のある降誕祭
凜として八ヶ岳大年の位置にあり
白鳥来雖もむやうな湖の風
踏みながらジーンズ洗ふ桜東風
風光る分けても峡の水こだま
春愁ひ検眼表の輪に切れ目
水門の魚道きらら五月来る



— 《第 32 回沖新人賞受賞作品抄》 —

芽落葉松ローランサンの空の色
ことばつつしむ万緑のなかにゐて
十字路を使ひきつたる夏つばめ
屋上に車の埋まる雲の峰
日焼けして木綿のシャツのやうな人
吊革に手首の入る大暑かな
貝殻にオホーツクの砂夏惜しむ
赤とんぼ水槲は夕日したたらせ
月白やシテの面の息づかひ
一週間どこにねかさうラ・フランス
秋澄むや八ヶ岳万年の水こだま

沖作品



能村研三選

東京

福嶋千代子

愛知

三好 智子

千葉

小松 誠一

長野

矢崎すみ子

人といふ文字のやさしさ花八つ手
断食の僧の目の澄み一位の実
東塔や満天星もみぢより暮るる
物書きの住まふ横丁小鳥来る
光年とふいのち更なり冬銀河
句碑の背に十年の露を結びけり
白光の遠嶺に釣瓶落しかな
箒目の波の浮き立つ十三夜
小さき音立てて良夜の朱の襖紗
失投の球の逃げ道草紅葉
じやが薯を届けて来るベントツかな
指先でいつきに脱がす衣被
胸分けて芒ヶ原の孤独かな
背負籠かごに小枝を敷いて山ぶだう
木洩れ日に紅を散らして水引草
水底の空の真青や鳥渡る

秋冷や鉄響く蔵の鍵
初雪や縄文の水汲みに来て
薄墨の霧の樹間に灯す宿
露しとど山気の寺に正座して
稲架解きて風かるくなる昼の月
ペーリングは嵐の墓場星飛んで
汐木もて舟底焙る神の留守
こぼれ魚に群るる鷗や御講風
内海に朝の日矢さす赤海鼠
星月夜燃ゆる一つは夫ならむ
一茎の折れに枯蓮みな倣ふ
湧くやうに瑞穂の国の赤とんぼ
着せかへてまた白づくし菊人形
新しき街お台場の十三夜
衣被わが菜園を出自とし
茎太の足柄山のをとこへし

大長崎

沖島 孝光

茨城

鮎川富美子

千葉

深田 雅敏

沖作品 選後句評

*
能村研三

光年とふいのち更なり冬銀河 福嶋千代子

「光年」は、とてつもない宇宙の広さを表現する言葉である。光が一年間に進む距離の単位となるが、その距離はざっと十兆キロ、地球上にいる人間社会の常識では考えられない尺度である。我々のいる太陽系は二千億個もの星が渦のように集まった銀河系の中にあり、その直径は十兆光年であるという。天文学的な数字を言えばきりもないが、その計り知れない宇宙に存在する一人の自分というものを考えると、人生の些細なことにくよくよすることなく、大らかに生きようと不思議な力が湧いてくるものだ。星は秋から冬にかけて空気も澄んでいるので輝きを増すが、明るい帯状となる天の川を冬銀河という。大きな宇宙からみた人間の存在を高らかに詠いあげている。

箒目の波の浮き立つ十三夜 三好 智子

この句、枯山水の庭園の風景が浮かびあがる。水を用いず、白砂や石で山や水を表現する庭は、日本人が持つ独特の美意識で、ごく限られた空間の中に幽玄の世界と大自然を凝縮させる。その背景は十五夜の名月より、やや夜の冷気が加わった十三夜のほうが凛として景も冴える。砂に描く箒目は熊手などつけられるが、川の水流れや、海の波を表現し、その文様は漣、うねり、渦紋などがある。箒目をつけていく作業は、ほとんどがその寺の若い修行僧によって行われるが、箒目の線と線の間が遠くに行くほど狭まっていく遠近感も演出する。

胸分けて芒ヶ原の孤独かな 小松 誠一

秋の草花の中でも、芒の花穂が風に揺れる姿は淋しく独特の風情がある。野道などいたるところに叢をなし生い茂ったりもするがいずれも生命力があつて逞しい。私も、箱根の仙石原に行つた時、目の前が夕日に映え身丈に及ぶほどの芒ヶ原を見たことがあるが、この句も目の前の一面を覆うほどのスケールの大きい芒ヶ原に遭遇したのだろう。そしてこの句の眼目は「胸分けて」という上五の表現で、普通であれば腰位の位置にある芒の叢を押し分けてくるところだが、それよりはるかに丈が長い位置にある所がおもしろい。だからこそ目の前の視界を遮るほどの壮絶さもあり、芒ヶ原に一人で分け入った孤独感も増幅する。
(以下略)